日光白根山(2,578m)は関東地方の最高峰で、麓にワタスゲやニッコウキスゲで有名な戦場ヶ原がある作家深田久弥によって選出された日本百名山の一つ。そして、シラネアオイ（シラネとは白根のことかな？）の咲き乱れる山でも有名なので、花の季節には、他の百名山と同様に大勢の登山者で賑わう山なのでしょう。

そんな日光白根山へ、山スキーを楽しもうと群馬県側の丸沼スキー場からのコースを登ってみました。ところが・・・・・そんなに甘くはありませんでした。

標高約2,000mのスキー場トップまではゴンドラリフトを利用。山頂までの標高差は 600m 弱、天気は上々、今日の山行は楽勝だと、期待に胸を膨らませてスキーにシール（滑り止め）をセット。

意気揚々と出発したにもかかわらず、暫くあるくと、コースは枝が密生した樹林帯に変わってしまいました。これでは樹間の滑降なんて無理、枝を掻き分けながら滑るなんてごめんこうむりたい。

それでも、「こんな箇所は、ごく一部だろう。」と登ったのですが・・・・

時折、樹上に姿を見せてくれる日光白根山は、その山頂に雲を流して朝日に輝き、張り出した枝に邪魔されて思うように歩けない私たちを「早く来いよ。」と手招きしているようでした。

一部には滑りやすそうな箇所もあったのですが、ついに、滑降を諦めて、スキーをデポして登ることにしました。ところが、スキーを外しての登行など想定外であったためにワカンジキを持参していなかった。このため、今度は、所々腰まで沈むラッセルに苦労する羽目に。スキーを外すのが少々早かったかと、後悔することしきり。

このコースは、中腹を 1/4 周以上回りこんでから登るように作られているため、ほとんど高度を上げることなくトラバースを続け、時にはこのような雪崩要注意の急傾斜の箇所も。

この日は、雪が安定していたのでアンザイレンせずに、一人ずつ通過したのですが、安全のためにはアンザイレンすべき箇所でした。

長いトラバースに飽きてしまい、途中からコースを外れてショートカット。トラバースから回りこんできている正規のコースに向かって直登です。

ふくらはぎをパンパンにしながら急斜面を登り、森林限界を越えました。が、この辺りは雲の中。視界も急速にせばまり、気を引き締めての登高に変わりました。

一本立てようかと思う頃に正規のコースに出会ってしまい、休憩のきっかけを掴めないまま、風のためか固く締まった雪を踏みしめて高度を上げると、突然のように蒼空の下に。薄くガスが流れる「この雰囲気に浸りたいために登る、これぞ雪山登山。」という素敵な風景に身も心も満たされ、つい先ほどまでの緊張の登高からワクワクする登高に変わりました。

中央に標柱と小さな祠の屋根が見え、写真では右上の山頂まで直ぐのように写っていますが、その間にはギャップがあり、一度、下ってから登り返すので、それなりに時間がかかってしまいました。

山頂エリアは、複雑な地形になっており、幾つもの岩峰がガスの流れる蒼空を突き刺し、感動の光景をかもし出していました。しかし、これが風雪、ホワイトアウトの視界不良時にはルートファンディングに要注意。というよりも、行動不能になることでしょう。

祠のある尾根の一角から山頂を見上げて、これからのルート確認。幸いにも最後の登りの部分には、あまり雪がついておらず、一部に夏道が出ていることから、ルートを間違えずに登ることができそう。

このため、重い登攀用具は、デポして必要最低限の荷物だけで山頂に向かいました。

風はそよ風、春の訪れを感じることができる強い日差しに輝く日光白根山の山頂での記念写真。

写したことがわずかなしかない山頂での記念写真を、素晴らしい眺望に浮かれていたのか、同行者の口車に乗せられて写してしまいました。

高峰の雲堤の下は尾瀬を取り巻く山並みでしょうか。

山頂からの眺望。左から山王烏帽子山、太郎山、男体山、そして中禅寺湖と広がる春まだ浅い日光の山並みです。

眺望だけではなく、切れ落ちた足元には、鋭い岩峰の影を映す白いルンゼの遥か下方に、シラネアオイの群生で有名な弥陀ヶ池。花の季節に来なさいとしきりに誘ってくれていました。でも、その有名なシラネアオイも、最近では登山中に見かけることが稀でなくなった鹿の食害で、激減してしまったとの噂も聞こえてきているのでちょっと心配。

夕日も見てみたい誘惑を振り切って下山。

山頂でノンビリし過ぎたため、登山口のスキー場トップに到着した時には、その営業が終了していました。そのため、ひろ～いゲレンデは、人っ子一人おらず、私達だけのプライベートゲレンデ。誰にも邪魔されずに滑降。この登山の最後を最高の滑りでシメテくれました。